2022 年 8 月 10 日

東京海上ホールディングス株式会社
取締役社長　小宮　暁　　殿
東京海上日動火災保険株式会社
取締役社長　広瀬　伸一　殿
東京海上日動あんしん生命保険株式会社
取締役社長　中里　克己　殿

東京海上ビルを愛し、その存続を願う会
会長　奥村珪一

存続への希望 「東京海上ビルを壊さないで」

拝啓、時下ますますご清祥の段、お慶び申し上げます。平素は格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、8 月 1 日に東京海上ビルディングの新たな計画案が公表されました。これを受け、改めて解体の見直しと東京海上ビルディングの存続を要望いたします。これまで 10 回以上のシンポジウム、講演会、見学会などを開催し、価値ある東京海上ビルディングがなぜ残せないかを検討し、都市再生の問題点、一般市民の建築要望等について意見交換してきました。そこでは、現状の都市計画や丸ノ内の景観、街や建築の記憶、脱炭素社会に向けた既存再生などの多くの意見が集まり、既存本社は壊さなくても使い続けることが望ましいと言うことを確認するに至りました。その結果を踏まえ、新計画案への意見を申し上げ、現東京海上ビルディングの保存改修を強く要望いたします。

敬具

皇居に面して巨大な壁が築かれる新計画案

１、人間性豊かな景観を守る

丸ノ内は、明治初期から現代に至るまで、三菱一号館や第一生命館、明治生命館、丸ビル、新丸ビルも、街のスケール感に調和した建築形態や景観がつくられてきました。前川の東京海上ビルは、外観は分節した適度のスケール感を持ち、外皮は陰影や素材感を大事に造られました。超高層という土地から離れた大空間を、なんとか人間性豊かな空間にしようとしたからであります。豊かな景観と広場が素晴らしい景観をつくりだしました。また、見学会では多くの人々がこの考えに共感し、このビルの価値を認めています。

それに対して、ピアノの新東京海上ビルは、幅約 80m 高さ 100m の壁が四方に展開され、巨大なガラスショーケースが皇居を威圧しています。残念ながら、新たな「景観論争」を呼び起こしそうなボリュームです。前川が残そうとした建築の人間性はこのビルからは全く感じられません。

そのことは、我々には耐えがたいことです。

２、「スクラップ＆ビルド」の CO2 排出は 10 万トン

新しい計画では木材を大量に使い、炭素排出量の削減を意図していると公表されています。

しかし、そもそも既存本社ビルを壊すことが前提にあることが問題です。利用可能なビルを壊し新築する「スクラップ＆ビルド」と、残し改修する「リノベーション」。その炭素排出量の差が 10 万トンにも及ぶことは発表には含まれていません。解体新設による CO2 排出量は公表すべきではないでしょうか。

脱炭素社会で考慮すべきことは、「つくることからつかうこと」へのシフトであり、現状を活かした改修での炭素量排出抑制が世界の主流となっています。現に霞が関ビルや新宿の超高層群は大規模なリノベーションで再生しています。脱炭素は人類の喫緊の課題であり、無謀な開発を廃止し炭素量の少ない改修を目指すべきと思います。炭素排出量 10 万トンを超える計画は直ちに見直すべきものです。

存続を願うシンポジウムの中で、「ニューヨーク 100 年の歴史の中で解体された超高層はたった一棟だけ。建替なんて想定外」と神田順氏は述べています。パリを拠点に活動する田根剛氏は「建築や景観の記憶を重視し、場所の記憶を頼りに考古学的アプローチで考えることが目標である」と熱弁されました。欧米では、30 年以上の維持された建築は容易に壊せないとのこと。

なぜ、保存再生の道を選ばないのでしょうか。

３、新たな改修提案

私達は、東京海上ビルディングを残すために、真剣に意見交換しました。コロナ禍の中、働き方改革や DX 改革により、本社に一極集中しなくても、ネットワーク型の分散型を併用すれば、本社機能を補完するができます。貴社もその対応は十分理解しているはずのことですが、なぜ、本社機能に執着するのか不思議です。加えて、東京が抱える大災害に対して既存超高層ビルの免震・制振化の技術的問題や災害リスクは解決する技術はあります。既存ビルを残し、既存を活かしたリノベーションでの本社ビル再生を再度お考えいただきたい。

一般市民を含めた多くの方々に存続改修の提案を現在求めており、8 月 31 日にその案をもとに意見交換を行うことにしています。

ぜひ東京海上関連の皆様も参加して、存続の声に耳を傾けていただければと、願っています。